

[国際基督教大学]

戦争と桜並木—和解の贈り物—

富岡 徹郎 学校法人国際基督教大学常務理事

国際基督教大学（ICU・東京都三鷹市）には、正門から大学礼拝堂に向けて約600メートルの桜並木がある。献学以来約70年の間、ICUで学ぶ全ての学生は、この桜並木のトンネルの歓迎を受け、大学礼拝堂の十字架を正面に見てから、教室に向かう。70本以上並ぶソメイヨシノは、春の訪れとともに一斉に花をつけ、やがて吹雪のように散っていく。毎年春には、この桜並木の下に学生たちが集まり、クラブ・サークルの新生勧誘が夜まで続く。その美しく楽しい光景は誰の目にも焼き付けられ、記憶されている。2020年は新型コロナウイルスの影響でひっそりしたキャンパスだったが、

ところで、この美しい桜が植え

られた由来と、そこがマクレーン通りと呼ばれる理由は、毎年新生たちにも伝えなければならない。それは戦後間もないICU創立時にさかのぼる。1945年8月に広島と長崎に原爆が落とされ、ついに第二次世界大戦が終結した。その翌年、米国バージニア州にある長老派教会のジョン・マクレーン牧師が、「汝の隣人を愛せよ」というタイトルの聖書からの説教を日曜礼拝において行ったという。その日に配られた教会の週報には、原爆投下のあった広島と長崎に哀悼の意を示し、隣人である日本のために和解の願いの表れとして、日本再建のための献金をしようということが書かれていた。昨日までの敵国であった日本を隣人と呼び、「和解のしるし」としての募金活動が呼び掛けられていった。やがてそれは、北米教会連盟協議会を通じて北米全土に広がり、日本に新しい大学をつくらうという運動につながった。日本への憎しみは、この勇氣ある「和解」といううねりにのみ込まれていった。同じころ日本サイドでも、全国津々浦々の平和を希求する人々からの寄付が集められた。日本の未来のためだけでなく、平和な国際社会の構築に貢献できる若者を育てるための大学構想に賛同する人々からの尊い寄付であった。それにより

ICUは三鷹で広大な土地を手に入れ、1953年に開学することができた。実はその土地は、戦中には軍事関連の中島飛行機の三鷹研究所があった場所だった。

集められた寄付金とともに、マクリーン氏からは桜の苗木がICUに贈られた。それらの植樹は1期生の学生たちも参加して行われ、その通りはマクリーン通りと名付けられた。この桜並木は、平和を願う人たちの和解のシンボルであり、募金という形で具体的な行動の証である。ICU生たちにとっては幸せの通り道であり、今日まで大学のシンボルとして大切にされている。また美しい並木は近隣の住民からも親しまれている。

さて、桜の木は生き物であり寿命がある。植樹から70年余りの歳月が過ぎた今、このシンボル並木の木々には、徐々にキノコが生え、幹の空洞化が進み、てんぐ巢病などの病にも侵されるようになってきた。バス通りでもあるマクリーン通りに、大型台風後などには枝の落下や倒木も見られるようになった。そこで、2011年から2015年にかけて実施した献学60周年記念事業として、「桜並木再生プロジェクト」と冠して広く募金を呼び掛けることとなった。1人3000円からの少額募金である。これには

大変多くの同窓生が協力してくださった。卒業期ごとに呼び掛け人が声を掛けてくれて、目標金額を2年で達成した。この桜並木は、多くの同窓生にとって母校を思い出するための貴重な景観である。この寄付をもとに、毎年数本の植え替えが進む。一方で、できるだけ既存木のケアをして、木の寿命を延ばす作業も並行して行っている。同窓生には、記憶に残る景色を見に、母校を訪れて元気を得てほしいと思う。2020年は、新型コロナウイルスの影響で、訪れる人のほとんどいない桜のシーズンであった。それでも季節は巡り花は咲く。早く学生たちの笑顔があふれるキャンパスを取り戻したいと切に願う。



[久留米大学]

御井学舎の^{けやき}櫨並木道

大矢野 栄次 久留米大学経済学部教授

1 久留米大学の開設

久留米大学は、九州医学専門学校を前身とし、第二次世界大戦後の1946年の大学令によって開設された旧制久留米医科大学に、予科が設置されたことから始まる。

1950年の学制改革による新学制の下で、新制久留米大学が設置された。旧制久留米医科大学予科の教員・設備を母体として、新制久留米大学商学部および医学進学課程（1955～1992年）が開設された。また、1956年には大学院を設置して医学研究科博士課程が開設された。

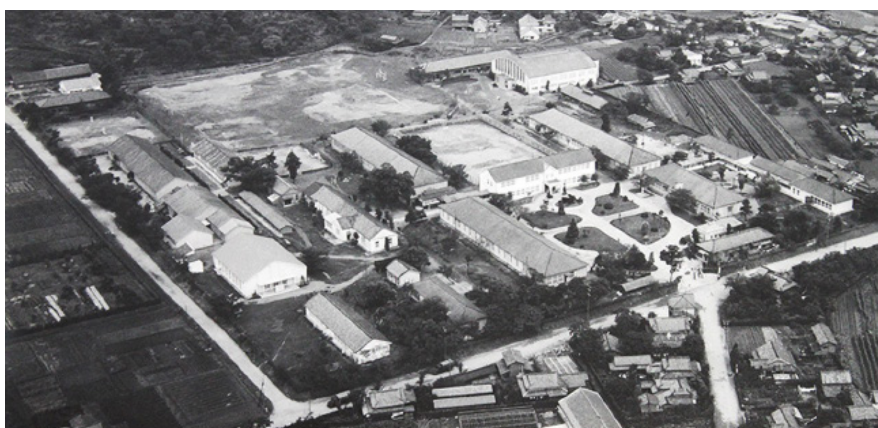
1980年代後半以降、商学部を母体として文系諸学部および文系大学院諸研究科が順次設置されて、現在、6学部（医学部・商学

部・法学部・文学部・経済学部・人間健康学部）と4研究科（医学研究科・比較文化研究科・心理学研究科・ビジネス研究科）、そして研究所、大学病院、附設中学校・高等学校、医学部附属臨床検査専門学校等を有する私立総合大学となっている。

2 陸軍時代の建物業

久留米大学御井キャンパスは、旧陸軍第12師団独立工兵第18連隊跡地（爆弾三勇士の所属部隊）である。構内の櫨並木では、散歩をする地域住民の姿もよく見られる。

久留米大学発足当時の教室は、旧陸軍の兵舎がそのままの状態で当てられた。図書館は、独立工兵第18連隊（久留米）の爆弾三勇士（肉団三勇士とも言われた）の記念館



[写真1] 旧陸軍第12師団独立工兵第18連隊跡地に設置された新制久留米大学

であった鉄筋建ての建物が当てられていた。この記念館は、ブリヂストン創業者石橋正二郎の寄贈で建てられ、坂本繁二郎が三勇士を描いた油絵が飾ってあったという。

その東隣には爆弾三勇士の台座があった。三勇士の銅製レリーフがはめ込んであったが、戦時中の金属回収で供出されたという。この頃の建物は旧陸軍時代の配置となっており、本館は北側を背に建てられ、正門から進入した車が玄関前に横付けできるように、車道と歩道が分かれて設置されていた。「写真1」

3 栗村雄吉第4代学部長と櫛並木

1963年に就任した栗村雄吉第4代学部長の時代に、長年の懸案だった校舎建設が進んだ。この時期に、栗村学部長の提案により櫛並木が設置された。栗村学部長は、米スタンフォード大学の見事なマグノリアの並木を称賛しており、東京・吉祥寺の成蹊大学に出張した折に美しい並木を見て、「ぜひ本学にも」との思いが強まったという逸話も残っている（商学部50周年記念誌より）。

栗村学部長が、「旭日町キャンパスそばのブリヂストン通りの並木からケヤキの種を採取して学生寮裏の空き地に植え、成長後に移植した」と記念誌にある。また、校舎周辺の適地

に植樹をして、大学内の緑化に努められたそうである。

4 櫛並木道と正門の移動

久留米大学商学部の正門は、旧陸軍久留米工兵隊の正門であり、正門前には旧陸軍時代の遺物として土堤が築かれていた。この土堤を撤去して鉄製フェンスを新設し、それに沿って遊歩道としての並木道が造成された。そのために、旧正門と直線の並木道との位置関係がずれることとなり、正門の位置を並木道に合わせて北部に移動し、旧正門跡は史跡「旧陸軍久留米工兵隊 門柱」として残されることになった。この際に爆弾三勇士の台座は撤去され、現在は南隣の九州沖縄農業研究センター久留米研究拠点の西側裏山に設置されている。



[写真2] 御井キャンパスの正門と櫛並木道

〔成蹊大学〕

ケヤキ並木と持続可能な未来への活動

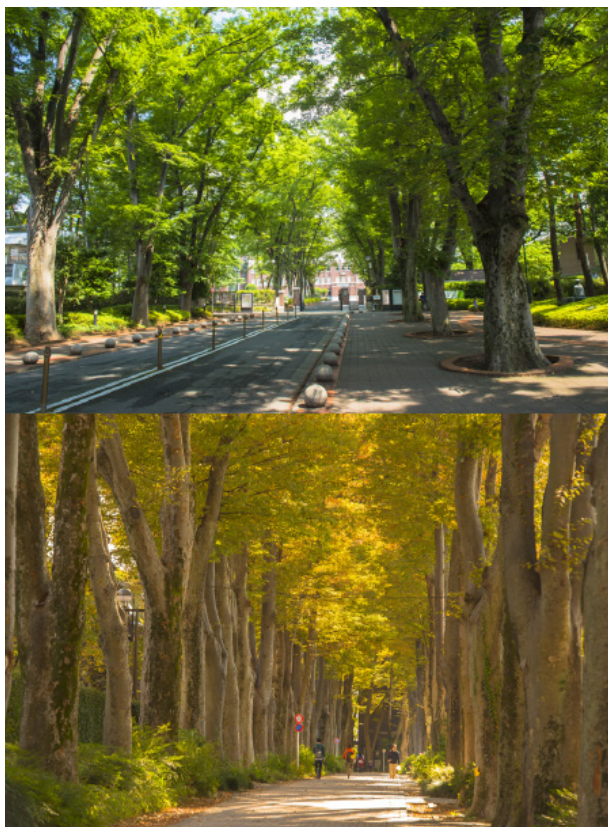
池上 敦子 成蹊学園ESDセンター所長

成蹊大学の北西隅、成蹊中学・高等学校の正門辺りから南上方を見上げる。春であれば薄緑、夏ならば力強い緑、そして秋ならばちよつと黄色く色づいたケヤキの葉の間から空が見える。研究室に向かう足を止め、大きく深呼吸して、そこに漂う優しくて明るい空気にしぼし浸ってみる。ここは、五日市街道から成蹊大学を含む成蹊学園の正門に続くケヤキ並木が、正門の中に続く並木と枝分かれした後に正門から左に緩いカーブを描いて中学・高等学校正門に向かう先の端っこである。並木の反対側（つまり、吉祥寺駅や学園正門）から、大学生や中高生が歩いてくる姿が、日差しでキラキラ見えるときなど、この大学にいて

良かったなあと思う瞬間である。

成蹊学園のケヤキ並木は、武蔵野市指定天然記念物（武蔵野市天然記念物第1号）、東京都「新東京百景」、環境省「残したい日本の音風景100選」として、武蔵野市、東京、全国の皆さんに親しみ楽しんでいただける空間と景色であり、成蹊が大切に育ててきたものである。植樹した1924年当時には、その高さが4〜5メートルほどだったと聞くが、今は30メートルを超す巨木も多い。

学園正門からは、学園本館に向かってケヤキ並木が続くが、ケヤキは成蹊の至る所で見ることができ、成蹊大学



成蹊のケヤキ並木

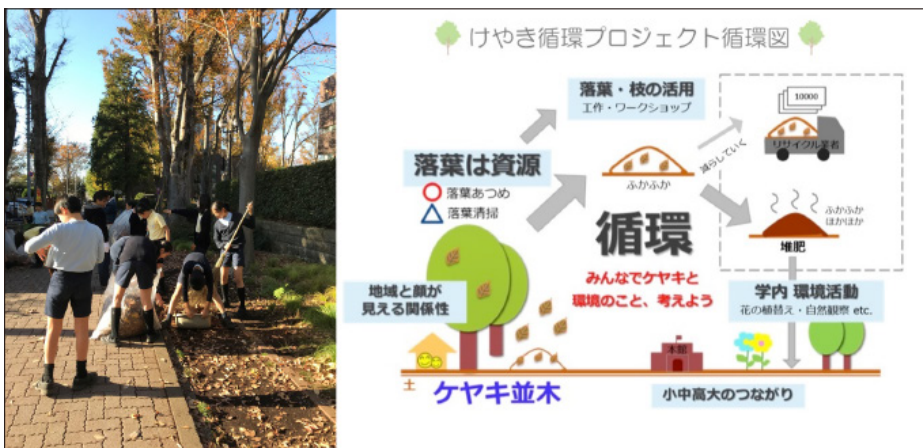
の学生や教職員にとって無くてはならない存在である。ふと見上げた瞬間に、ほっと癒され、励まされる。

成蹊にはたくさんケヤキがあるので、その落葉の量もなかなかすごい。秋はこの落葉を踏み締めて歩くのが楽しいが、落葉掃除もまた楽しい。成蹊大学と同じ敷地にある成蹊小学校では、自らが育てたものを観察し、最後は食べしてみるなど、体験して楽しむことでさまざまなものの循環を理解していくが、その活動の一部にケヤキの落葉を利用した焼き芋大会がある。大学生や小学生が落葉掃除をした後に実施される。掃除に参加せず、研究室で研究している学生にとっては、なかなか刺激的なおいしそうな香りが構内を埋め尽くす。

成蹊学園／成蹊大学には、持続可能な未来を担う人材を育むための教育＝ESD(Education for Sustainable Development)を支援する「サステナビリティ教育研究センター(ESDセンター)」という機関がある。世の中にSDGsという言葉が大きく広まる少し前、2018年4月に設立された。小中高大の児童生徒学生、教職員、卒業生、地域、支援企業が一体となって活動を行っている。その結果もあり、成蹊学園は2019年11月、ユネスコス

クールに認定された。成蹊大学は、ASPUInivNet(ユネスコスクール支援大学間ネットワーク)加盟校でもある。

ESDセンターが母体となって行っている活動に「けやき循環プロジェクト」がある。以前は廃棄していた落葉を焼き芋だけでなく、堆肥作りに利用し、成蹊内の畑や花壇で活躍させるのである。馬術部の馬糞も堆肥作りで重要である。成蹊のケヤキは、景観だけでなく、ものの循環を理解する教育や、環境を意識する際の、われわれの大事な仲間になっているのである。



けやき循環プロジェクト